

タイの初等教育段階での英語教育

ポーンピモン・プラソンポーン博士

シーナカリンウィロート大学(タイ)

prasongpornp@hotmail.com

英語は国際語あるいは世界言語と言われていることから、様々な国の人々とのコミュニケーションや相互理解を図るための重要な鍵として広く使用されている。また、公用語、教授言語、必修科目、共通語など多様な形態で、英語は重要な役割を果たしている。コミュニケーションの手段として英語の力を認識することは、世界中で受け入れられている。また、タイでは急速に英語は初等教育段階で学習者が学ぶ基礎的なスキルの一つとなりつつある。タイにおける英語の需要は、グローバル化への変容によりここ数十年で急激に増しており、ASEAN 共同体の設立は語学学習に大きな変化をもたらした。その結果、政府はタイの学生の英語力をさらに向上させ、タイ人個人としても国家としても経済競争力を高める準備を進めることに意気込みを示した。語学学習は世界における経済競争力を高めるために必要なだけでなく、コミュニケーションのための手段でもある。従って、英語は商業、観光、研究、学際的領域へのアクセスを含む様々な動機で可動性を高め、それにより、個人、国家、地球市民の繁栄に貢献することになる。タイでは、英語は語学教育システムにおける門番的な立ち位置にあり、極めて重要な役割を果たす科目とみなされている。生徒は学校生活が始まる初期段階から英語を学んでいる。英語は初等教育段階から高等教育まで必修科目である。

タイの初等教育段階での英語教育における主要課題

英語の改革政策

タイ政府は、グローバル社会で英語が極めて重要な役割を果たすことを認識しており、教育省が生徒及び教員の英語力を高めることを認めている。英語の指導と学習を促進するための政策や戦略計画が各政府から発表されている。教育省も英語の指導と学習の効果を高めるプロセスには、すべての関係する発展的要素、すなわち語学学習に関する政策の明確さ、政策を実行に移すための解釈、カリキュラム開発、教員の質、指導と学習のプロセス、提供される教材のプランを含むべきであるという見解を示している。

2014年、教育省は基礎教育段階における英語の指導と学習を改革するための最新の政策を発表した。政策に関しては、近い将来に語学の目標を明確化し、タイの若者の英語の水準を向上させる上で、「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)の採用は極めて重要なステップであると、教員と学者の双方の間で一般的な見解が一致している。この政策は、ASEAN共同体に向けてより準備を整える上で、タイ人の英語力を向上させるための強いコミットメントと確かな試みとなる。英語に関する政策の詳細は以下のとおりである。

1. 言語の国際基準とみなされている「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)は、英語の指導と学習を実施し、語学カリキュラムを策定し、学習目標を宣言し、指導と学習を発展させ、学習の成果を分析・評価し、教員の職業専門性を高めるための主要原理として各学校が利用することと規定されている。この参照枠は語学のコミュニケーション能力を基準に従って評価するために使われ、A1 から C2 の 6 段階に分けられている。また、教育省は学生に対し、初等教育終了時まで A1 を達成していることなど英語力の目標も掲げている。
2. 「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(CLT)を重視し、また指導のアプローチの状況を文法訳読から「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」にシフトさせることにより、語学の指導と学習プロセスを自然な指導と学習に近づける。また、英語学習はリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの順に始めるべきであるという考え方を取り入れている。
3. カリキュラムや指導と学習の教材、各学校の準備状況とともに生徒の態度や関心によって様々な導入手段を「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)の基準に一致させることを通じて英語の指導と学習を促進する。
4. 以下のような学習のプログラムを立ち上げることにより、英語力の向上を強化する。
 - 4.1. 公立及び私立の基礎教育の全段階で「英語プログラム」(EP)、「ミニ英語プログラム」(MEP)、「国際プログラム」(IP)、「英語バイリンガル教育プログラム」(EBE)、「総合学習のための英語」(EIS)を設けることにより語学学習の特別なプログラムを展開する。
 - 4.2. 「強化クラス」(Enrichment Classes)を設立することにより、社会的相互作用、学問的リテラシー、一週間に最低二時間の会話クラスを追加することを含む英語学習のための特別なプログラムを展開する。さらに、学校を辞めて働く必要がある生徒に準備させることを目指した「キャリアのための英語」のカリキュラムやコースをもっと実施していくべきである。
 - 4.3. 2週間から4週間(84時間から170時間)にわたる集中的な英語キャンプや、学校の長期休暇中の特に可能性のある生徒向けの国際キャンプなど、英語学習を促す活動や学校の環境を作ることで、英語の能力を高めるよう促す。学校は、語学学習の追加的な時間、半日間または一日ないし数日にわたる連続的な語学学習の時間を設けることができる。さらに、学校内で「リテラシー(読み書き)の日」、「英語ゾーン」、「英語コーナー」、語学コンペやコンテスト、掲示板、授業内に限らず幅広いジャンルにわたる読書の習慣の奨励など、学習者にコミュニケーションの実践を推進することを手助けする積極的な環境づくりが行われなければならない。
 - 4.4. 英語の授業で、指導と学習の中に英会話を取り入れ、また英語学習に関心や可能性を持つ生徒に対して、追加又は選択科目として「英語強化」(English Enrichment)コースの履修を推進する。

5. 「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(CLT)の概念と「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)に沿った語学指導における教員のスキルを向上させる。英語の内容とスキルの両方に関して英語教員を評価する。その結果、教員の能力に基づいて、教員の専門能力の開発プラン、監督及びモニタリング・システム、コーチング及びメンタリングのプロセスを実施することができる。
6. 教員と生徒の語学能力を高めるための手段として、教育で情報通信技術(ICT)メディアの活用を推進する。デジタル・コンテンツによる学習アプリケーションの制作と選択、語学の実践、英語学習として標準化され、ふさわしいと判断された試験も含まれる。さらに、ここではデジタル・メディアを通じてリスニングや、単語または文章を発音するスキルに関する語学学習を重視する。

2008年基礎教育コア・カリキュラム(Basic Education Core Curriculum 2008)の要素及び実施

初等教育の学校及び教員の大部分は精力的で、カリキュラムの開発プロセスにより高い関心を持っている。教員は、自分自身が指導と学習のプロセスにおけるカリキュラムの役割を理解し、認識できるよう、学校ベースのカリキュラム開発に携わっている。教育省は2015年基礎教育コア・カリキュラム(Basic Core Curriculum 2015)に着手した。ここでは、科目の各領域において、学習の基準、指標、核となる内容が規定されているため、授業プランニングに役立っている。これらはすべて達成すべき指導と学習を導く要素となる。

2008年基礎教育コア・カリキュラムの語学学習領域に基づき、英語は初等教育の1年生から中等教育の12年生まで必修科目の一つとなっている。語学学習は、学習者が語学に対して好ましく、前向きな姿勢を持てるようにすることのほか、様々な状況でコミュニケーションを図るため、知識獲得のために研究するため、生活するため、より高いレベルの高等教育を追求するために英語を使用する能力を身につけることを目的としている。英語の主要な内容は、コミュニケーション(Communication)、文化(Culture)、結びつき(Connection)、共同体(Community)という四つの学習領域を含む八つの基準から構成されている。各学習領域の焦点は以下のとおりである。

1. コミュニケーション(Communication) : 英語はコミュニケーション様式、すなわち解釈様式、対人様式、発表様式であることから、主に英語を使用することについて焦点を置いている。したがって、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの四つのコミュニケーション・スキルが含まれている。情報交換、感情や意見の表現、解釈、様々な問題に関する情報、概念や見解の提示、適切な対人関係の構築を図るために言語を使用することを目指している。

2. 文化(Culture) : ネイティブ・スピーカーの文化、ネイティブ・スピーカーの文化と言語の関係性、類似性及び相違点、ネイティブ・スピーカーとタイの言語と文化、と調和して適切に外国語を使用することを目指している。
3. 結びつき(Connection)、または言語とほかの学習領域との関係性: 知識を他の学習領域と結びつけるための外国語の使用を指し、更なる発展の基盤を形成し、知識を探求し、学習者の世界観を広げる。
4. 結びつき、または言語と共同体(Community)や世界との関係性: この学習領域は、教室内、外の地域社会、グローバル社会などあらゆる状況で外国語を使用することを目指し、高等教育、生活、グローバル社会における学習の交流のための基本ツールを形成する。

初等教育における英語学習の時間配分

基礎教育コア・カリキュラムでは、基礎教科の中で1学年につき40時間を英語学習に配分するという枠組みを規定している。すなわち、初等教育を受ける生徒は、1年生から3年生までは1週間に最低1時間、4年生から6年生は2時間英語を学習する。さらに、学校は必要に応じて追加的な英語のコースを設けることが認められている。

学習領域／活動	学習時間(時間)									
	初等教育						前期中等教育			後期中等教育
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	10-12年生
外国語	40	40	40	80	80	80	120 (3コース)	120 (3コース)	120 (3コース)	240 (6コース)
•学校が準備状況や優先度に応じて提供する追加的なコース／活動	毎年 40 時間以内						毎年 200 時間以内			1,600 時間以上
学習時間の合計	毎年 1,000 時間以内						毎年 1,200 時間以内			3年間で合計 3,600 時間以上

(教育省、2008年:25)

タイの初等教育段階の英語の指導と学習の現状

学習者

生徒の達成度は、教育システムの成功を示す重要な要素であることから、語学学習には生徒の成績に傾向が現れることがわかっている。生徒の達成度は飛躍的に伸びているものの、依然として一般に認められている基準を下回っていることが証明されている。また、生徒はまだ英語でコミュニケーションを図ったり、知識の研究に英語をツールとして活用したりすることができていないこともわかっている。大部分の生徒は、間違いを恐れ、恥ずかしさがあることから英語を使用する自信がない。

教員

教員は生徒に知識体系を伝達することから、教育に成功をもたらす重要な要素の一つである。教員は基礎教育委員会(Basic Education Commission)の監督下であり、英語を教える教員全員が英語の能力を測るために「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)に基づく試験を受けなければならない。そして、CEFRに規定されている通り、教員は六つのレベル、A1 から C2 または初級、中級、上級に分けられる。英語の教員であるためには、英語に関する知識と教える技術の両方に熟練している必要がある。これは教員審議会(Teacher Council)に規定されている教員という職業に求められる要件である。その結果、語学指導に関する教員の知識を測定するために、英語教授知識認定テスト(Teaching Knowledge Test、TKT)が使用されている。

現在検討されている問題は英語力のある質の高い教員である。英語を含む全科目の指導を受け持ち、英語を教える小学校教員は、英語の指導も含む小学校教育の学位は取得していても、その半数以上が英語を専攻していない。彼らは英語の授業を行うことに自信を欠いており、その結果、英語教員としてキャリアを成功させることができない。政府はこういった教員の英語力を向上させるため、英語及び英語教授法に関する現職研修プログラムを提供して支援することに取り組んでいる。

指導と学習のプロセス

英語の教員は、指導プロセスについて革新的で多様なアイデアに着手しようと努力している。指導と学習のプロセスには思考スキルも含めている。また、補習、英語キャンプ、学校内の「英語コーナー」を通じた読書活動の推進などの英語学習の活動を展開することにより、生徒がより現実的な状況で英語を使用できる

機会により着目している。とは言うものの、教員の能力や学校の環境の限界から、これらの活動がすべての地域で実施されているわけではない。依然として指導の手段として教科書を用いる教員もおり、語学の指導法は豊富なわけではない。また、英語の授業で英語を使用する機会が不足していることも分かっている。その結果、生徒は自分たちにとって英語はそれほど重要ではないと考え、語学学習に対して否定的な姿勢を持つことにつながることもある。教員はリスニングやスピーキングよりも、リーディングやライティングのスキルを教えることを好む。「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(CLT)の導入以降、タイのすべての学校の教員は、スピーカー同士の交流や社会的状況の中で使用される言語を重視するコミュニケーション・ランゲージの学習活動を通じて英語の授業を行う訓練を受けてきた。こういった活動の例には、ゲーム、歌、ロールプレイング、全身反応教授法(TPR)やインフォメーション・ギャップを使ったアクティビティなどが含まれる。

学習教材

教科書や教材は学校によって様々である。大部分のテキストはネイティブによって書かれており、テキストに用いられている言語形式や言語特性は正しいと確信できる。教科書や学習教材の選択に関しては、どのようなソフトでも電子機器でも、教員は高い自主性を持っている。考慮されなければならないのは、すべての学習教材が基礎教育コア・カリキュラムと合致していなければならないということである。教員がこのような教材を使えば使うほど、生徒は語学学習にもっと同時にアクセスすることができる。

タイの初等教育段階における英語教育を推進するための基礎教育委員会(Basic Education Commission)の支援

英語研究機関である基礎教育委員会(Basic Education Commission)は、政策を実践する上で極めて重要な役割を果たしている。初等教育段階における英語教育の推進に関するプロジェクトは以下のように実施されている。

1. コミュニカティブ・アプローチを通じて指導と学習を改革する

指導方法の変更について国民の意識を高め、理解の橋を架けることを目指して、英語の指導と学習にコミュニケーション・ティーチング・アプローチが取り入れている。成功事例の実地説明や普及英語エキシビション(English Exhibition)、教育の全段階及び政府部門、民間部門、地域社会、保護者といったあらゆるステークホルダーでの知識の交流など、より多くの活動が様々な形式で推進されている。これらは語学教育の運営に関わる人々の間でコラボレーションを形成することができる。学校の休暇期間中に現職教員研修を実施するための教員研修の予算がすべての初等教育サービスエリアの事務所(Primary Educational Service Area

Offices)に分配された。研修内容には、「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(CLT)の概念、語学授業におけるその実践、「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)の枠組みと意義が含まれている。

2. 英語の教員の能力開発

教員は学習の重要な成功要因であるため、教員の教科内容知識、つまり英語力に関する教員の可能性を高めることが必須である。基礎教育委員会(Basic Education Commission)は、教員の英語レベルに基づいた現職教員研修を実施する教員開発プログラムを導入した。教員の英語レベルは、初級、中級、上級のすべてのレベルで発展させることができ、高い可能性を持つ者は特定の学習領域やスキルの訓練が受けられる。最新のプロジェクトは2016年度に開始、実行に移され、教育省はブリティッシュ・カウンシルの協力のもとで、上級レベルの英語力を有する500名の教員を選定し、語学の教授法を教え、のちに「トレーナー養成コース」を受けさせる現職研修を実施する。

3. 英語の指導と学習への公平なアクセスの確立

すべての教育サービスエリアの生徒が、効果的に英語を学習する機会にアクセスできるよう、すべての段階及び種類の学校が改善されなければならない。すべての教育サービスエリアで英語教育のモデル校(Model English Teaching School)が設立され、英語プログラム又はミニ英語プログラムの学校が1地域に最低1校できている。英語プログラムを実施する学校の数は全国で急激に増えている。また、指導教材や標準的な英語の教科書も広範囲の地域に提供されている。

4. コミュニカティブ・アプローチを支援するための英語の指導と学習リソースの開発

コミュニケーション・アプローチを支援するための英語の指導と学習リソースを開発するため、以下を含む要素が開発されている。

4.1 「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)に基づくカリキュラム・ガイドラインの開発

「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)の導入方法に関するワークショップや教員研修がすべての教育段階で実施されている。教育省は、教員マニュアルと併せて、教員向けにどのように「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)に基づく語学活動を作るかに関するガイドラインを作成した。また、教育省はカリキュラムの作成、即ち生徒の達成度や成績に関する研究も計画している。

4.2 ネットワークの強化

初等教育の英語リソースセンター(Primary Education English Resource Center, PEER)が初等教育段階で、すべての初等教育サービスエリアで推進されている。このネットワークは、英語教員が知識、能力、使う英語スキルを身に付け、また指導と学習のマネジメントを行う上で役立つ。

このような活動を通じて、ネットワークは英語教員が教育サービスエリアで指導経験や人的リソースを共有したり、専門家の学習共同体を形成したりすることも推進できる。

5. 授業の内外で英語を学ぶ雰囲気を作り、英語を学ぶ機会を増やす

学校の授業の内外で英語を学ぶ機会は、以下のように増えている。

- 5.1 英語キャンプや英語コンテスト、語学の才能を伸ばす活動など、授業内及び課外での学習活動を通じた生徒の英語スキルの能力開発。
- 5.2 英語学習のイノベーションは情報通信技術 (ICT) を通じて生み出されている。学校は生徒が英語に自然にアクセスできるよう手助けすることができる。グローバル化の時代の中で、情報通信技術 (ICT) はタイの英語教育のみならず、コミュニケーションと教育の世界において一層大きな役割を果たしている。情報通信技術 (ICT) に関わる学習教材は、英語のネットワーク校の学校に全国的に提供されている。DLTV (Digital Learning TV、デジタル学習用のテレビ) や Teacher TV (教員用テレビ) は、授業外で英語学習を必要とする教員や生徒のためのチャンネルの例である。さらに、これらは教員不足の問題を解決する手立てにもなる。地方や遠隔地の小学校の中には、英語の授業に DLTV で放送される授業を使う学校もある。

提言

英語は語学学習に大きな影響を与えることから、より入念な準備が語学教育の成功につながる。英語の指導と学習の成功は、政府、民間部門、教育機関、学者、英語を母語とする国々の企業による協力といったすべてのステークホルダーの献身とコラボレーションを必要とする。更に重要なのは、教員や生徒自身がグローバル社会におけるコミュニケーション手段として英語を習得する重要性を認識し、すべての学習者が理論的な枠組みやスキルを習得するだけでなく、それらを自分の文化や現地語に対する理解を意識しながら効果的に実践していくという認識を持つべきである。

参考文献一覧:

ベイカー、W.、2008年、「A critical examination of ELT in Thailand: The role of cultural awareness」
RELC. 39(1)、131-146.

ベイカー、W.、2012年、「English as a lingua franca in Thailand: Characterizations and Implications」
Englishes in Practice, 1、18-27.

ブラウン、H.D.、2007年、『Principles of language learning and teaching』 New York: Pearson Education, Inc.

教育省、2008年、「The Basic Education Core Curriculum B.E. 2551 (A.D. 2008)」

入手可能なリンク:academic.obec.go.th/web/doc/d/147[2013,November 1]

教育省、2014年、『The Guidelines on English language teaching and Learning Reforming Policy』 Bangkok: Chamjureeproducts Ltd.

ヌーム=ウラ、S.、2013年、「English-teaching problems in Thailand and Thai teachers' professional development needs」 English Language Teaching, 6 (11)、139-147.

プランソンポーン、P.、2009年、「CLIL in Thailand: Challenge and Possibilities」 Access English EBE Symposium (ジャカルタ)